

私がなぜ現在の科目を選んだか

「泌尿器科」

信州大学医学部泌尿器科学教室

鈴木智敬

医学部5年の泌尿器クリクラの際、初めて見学した手術が前立腺癌に対するロボット支援下手術でした。幼い頃からロボット系の作品が好きであった私にとってda Vinciのコクピットのようなコンソール、がっしりとしたアーム、鉗子の精密かつ滑らかな動作、全てが輝いて見えました。その感動が冷めやらぬままに見学した次の手術が膀胱癌に対する経尿道的手術でした。先ほどのロボット支援手術で感じた重厚な雰囲気から一転、カリフラワーのような腫瘍をループ状の電極がサクッと切除する様子を見学し、一つの科の中でここまで手術方法に差がある泌尿器科という診療科に興味を湧きました。最初は様々な器具を使用する泌尿器科の手術に惹かれた私でしたが、一度興味を持ってからは診断から治療、その後のフォローまで一貫して取り組む診療科としての特徴や尿路系や男性生殖器だ

けでなく、小児泌尿器や女性泌尿器と老若男女問わない多種多様な疾患を取り扱うという幅広さにも興味を持ち、医学部卒業の時点で泌尿器科の道に進みたいと考えるようになりました。

初期研修で実際に泌尿器科を選択し、学生ではなく医師として患者さんと接した後もその思いは変わることなく、むしろ思いは強くなる一方でした。また、長く携わっていくことになる専門科は自分が興味をもって取り組める科が良いとも考え、やはり泌尿器科の道に進もうと決心しました。

昨年4月から泌尿器科医として勤務していますが、クリクラ中にサクッと切除しているように見えた経尿道的手術がいざ自分で執刀してみると中々上手くいかず反省することがあります。また、外来で自分の診断や治療が本当に正しいのかと迷うことや多種多様な疾患を取り扱うが故に多くのことを学ばなければならないと痛感することもあります。ですが、自分が興味を持って選択した診療科であるからこそ、好きこそ物の上手なれで日々着実に成長できるようこれからも精進していければと思います。

(大分大平28年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「分子病理学・分子腫瘍学」

信州大学医学部分子病理学教室

藤井千文

「ポリープはなぜがんになるのか？」私が、がん研究を志すきっかけとなった疑問です。

高校生の頃、腹痛が酷く内科を受診したところ、「胃にポリープがありますね、放っておくとがんになるから取りましょう」と言われました。主治医の先生は、私のポリープ、正常な胃の組織、胃がん患者さんの組織、の生検標本を顕微鏡で見せて下さり、細胞の形が違うことで良性か悪性かの診断をすると説明して下さいました。当時は病理学という言葉は知りませんでしたが、これが私と病理学との出会いでした。

実験と化学が好きだった私は、「細胞の形が変化してがんになる？がんになるから形が変化する？」という現象の原因を実験で突き止めて分子の言葉で説明できないだろうか？等と漠然と考えていました。一方で、教師になることを目指していた私は、理学部化学科に

進学しました。しかし研究への思いを断ち切れず、理学部修士課程、薬学部博士課程へと進学しました。研究を続けるか、教師になる道を選ぶか、悩んでいた私に、指導教官の中西 義信教授が、「研究も教育も両方頑張れる大学の教員を目指してはどうか」とアドバイスを下さいました。悩みは一気に解決し、学位取得後、金沢大学がん研究所（現：がん進展制御研究所）向田直史教授のもとで、慢性炎症からの発がんメカニズムの研究に携わる機会に恵まれました。高校時代の漠然とした疑問は、「腫瘍の悪性化の分子機構を解明して、新しいがんの治療・予防・診断法に繋げる」という大きな目標に変わりました。

信州大学に着任後暫くして、分子腫瘍学教室谷口俊一郎教授のもとで、転移性がん悪性化の分子機構の研究の機会を与えて頂き、現在は分子病理学教室中山 淳教授のもと、胃癌悪性化の分子機構の研究を行う環境を与えて頂いています。なぜがんになるのか？の答えを探しながら教育も頑張れるという仕事ができることに感謝しつつ、大きな目標に向かって邁進する日々を送っています。

(金沢大大学院平13年卒)